

題目 環境問題の会話における多元的無知：プラスチックごみ・ポイ捨てに関する
社会調査

氏名 足立 千尋

指導教員 大沼 進

本研究は、プラスチックごみ・ポイ捨てを題材にして、環境問題に関する会話を妨げる要因として多元的無知が存在するかを検討する目的で行った。環境コミュニケーションは環境配慮行動促進などへの重要性が指摘されてきた。中でも身近な他者との会話は重要であるが、実際には環境問題に関する会話はあまり行われていない。その原因として、多元的無知が存在している可能性が考えられている (Geiger & Swim, 2016)。しかし、現実においてどのくらいの人が多元的無知のために話をしていないのかを確認した研究は見つからない。そこで、本研究では、環境配慮行動に関する会話を妨げる要因として多元的無知があるかを確かめた。ただし、社会的な表象である多元的無知を直接測定することは難しいため、本研究では、個人の変数測定から、ある個人が多元的無知の状況下にあることを示す。多元的無知により環境問題に関する会話ができないことを示すために、話をしたいという行動意図（話題意図）の高さと話をするという行動（話題行動）の高低によって群に分け、それぞれの群間に、会話に関する認知に差があるかを比較した。具体的には、話がしたいと思っていながらも話ができない人は、多くの人が話をしていないという記述的規範や、話をしないように周囲から期待されているという主観的規範を高く、話をするのが容易だという実行可能性評価を低く、周囲の他者の無関心さを高く感じているだろうと予測した。

日本全国 18 歳以上男女個人を対象とした WEB 質問紙による調査を行い、4642 の有効回答を得た。分析の結果、予測は概ね支持された。さらに、話題意図と話題行動の乖離に、どの程度記述的規範や主観的規範が介在しているかを明らかにするために決定木分析を行った。話題意図が低い人は、その意図の低さ自体で話題にしないという行動と結びつくが、記述的規範の影響を受けている層も見られた。話題意図が中程度からやや低い人は、話に関する記述的規範や主観的規範の影響を大きく受けていた。話題意図が高い人は、その意図の高さ自体が話題行動を規定していたが、実行可能性評価や記述的規範の影響も受けている層も検出された。まとめると、全体的には話題意図の高さによって話題行動が説明されるものの、話題意図と話題行動の間に乖離がある層では多くの他者が話題にしないという記述的規範の影響が見られたことから、多元的無知の存在を含意する結果が得られた。